

Attachment or Ownership: Experimental Test of Attachment and Reference Point Shift

一橋大学大学院修士 2 年

仲田 真

これまで保有効果は保有が生み出すと解釈されてきたが、本論文は愛着感が財への価値認識を変えるという解釈のほうがふさわしいということを提起する。

Knetsch(1989)によって保有効果と呼ばれてきた現象が発見された。財の保有者は非保有者に比べ、財の価値を過大に評価する傾向がある。これはプロスペクト理論の損失回避性を用いて解釈されてきた。(保有効果理論)しかし Plott and Zeiler(2005, 2007)によって、実験手順を整えることで保有効果はなくなり、保有効果理論は排除された。最近の研究 Knetsch and Wong(2009)によると、保有ではなく、保有感を持つことで損失回避性が現れるとした。

本論文では、保有や保有感ではなく愛着が保有効果を生み出すことを主張する。この愛着効果を用いると、これまで保有や保有感が主観的な価値を上げると考えられてきた保有効果は、愛着感によって説明できる。つまり、これまでの保有効果にまつわる実験において、保有者は非保有者に比べて財に愛着を持っているので、主観的な価値に違いが生じたという解釈である。この解釈を用いると、Isoni et al.(2011)によって報告されている、財に対しては保有効果が存在しないが、お金を対象としたくじに対しては存在するというパズルを説明できる。財に対しては愛着を持つが、お金には愛着を持たないので、財とお金に対して異なった現象が起こるのである。

この新たな解釈が妥当性を持つことを、愛着を外生的に操作する実験を用いて検証した。プライミング操作を用いて愛着の変化を促すことで選好の変化を観察し、上記の仮説が妥当である事を示した。実験手法にはプライミング操作と言われる心理手法を取り入れ、財の性質へ意識を向ける心理状況を作り出して、選好の変化を観察した。

最後にモデルについて議論する。これまで保有効果の解釈には、損失回避性を用いられてきた。しかし、保有による参照点の決定の考え方では Knetsch らの結果を説明できない。これまで用いられてきた参照点変化の理論を修正した。2つのモデルを挙げる。ひとつは価値関数の参照点が愛着によって変化するモデルであり、もうひとつは価値関数の傾きが愛着によって変化するモデルである。